
コトラ！

篠白 犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コトラ！

【Nコード】

N5742A

【作者名】

篠白 犬

【あらすじ】

妖怪を退治するクラブ。その名も妖怪クラブ。部長空谷純が、相棒白い虎のコトラと共に妖怪退治に繰り出す。他にもみっちゃんにメロメロの竜がいたり、薄黄色の鳥が大阪弁で話したりと大騒ぎ。阿呆ばっかの妖怪退治物語。

第一話：プロローグ（前書き）

お初にお目にかかります。篠白 犬と申します。妖怪退治物語、楽しんでいただければ嬉しいです。 楽

第一話：プロローグ

あなたは妖怪なんてもの、信じますか？

僕は信じますよ。

だって、見えているんですから。

とある学校に妖怪クラブなんていう部活があった。

ただし、正式な部活ではないため、クラブと名乗っているだけである。

部室も質素。

必要最低限のものしか置いていない。

だが、その最低限のものが少し変だ。

本棚には妖怪大辞典なる本が置いてあるし、御札のような、長い紙が散らばっていたりする。文字らしきものが書かれていた。

ミミズが踊っているような字とはこんな感じなのだろう。

そしてきわめつけが大きな虎。

学校のなかだというのに、堂々と昼寝をしている。

大きな牙が、口から収まりきらずにはみ出ていた。

ここが妖怪クラブなら、この虎も妖怪なのかもしれないと思った。

ガチャリ、と扉の開く音がした。

「こんにちは、なにか妖怪で困ってるのかな？」

第二話

おずおずと少女は前にでてきて言った。

「はい、実は折り入って相談が……。」「あつ、そんなに緊張する」とないよあ、リラックスリラックス。」

多分、この人が部長だと思う。
そんな風格だった。

白髪の間をしてる。

はっちり校則違反なのは本人も気付いているだろう。
首には真つ白のマフラーをしていた。

この人の周りだけが冬みたいだ、と彼女は思った。

真つ黒の制服にその格好は映えすぎていた。

「あ、僕の名前は空谷純、ソラタニジュンどうぞごひいきに。」
返すことも出来ずに軽く介錯する。

「いやあごめんね、なにも出せなくて。」

そ、そんな滅相もない、と返した。

それよりも気になることが彼女にはあったのだ。

「あ、あの、その虎？ってなんですか？」

少女が指を指す先には先程の虎。
とても気持ちよさそうに眠っている。

「はい、コトラ起きてね。」

といいながら空谷は、白い虎の尻尾を思い切り踏み付けた。

「いだだだだ！痛い、痛いよ！」

ばびょーんと効果音がつきそうなくらいの勢いだ。

怒りながら、眠っていた虎は飛び起きた。
自分だったら…、と当てはめてみる。

たまったもんじゃないだろう。

「えっと、こいつはコトラ。僕の相棒さ。」
と空谷は説明した。

「あい、ぼっ…？」

「そ、相棒！つっても僕の奴隷みたいなも…」

そんなんじゃないだろ！、とコトラのビンタが炸裂する。

第三話

「ごめんごめん、冗談。」

とコトラに謝っているものの、顔は全く反省していない。

「それで、なにか相談があつたんでしょ？なんでもいいから言つてよ…って言われてもよくわかんないよね。まず、ここがなにをするところかっていうと…」

言いながら、小さな瓶のようなものを取り出した。

と言つてもそこまで大きいものではなく、制服の胸ポケットに入りそうな大きさだ。

それをゴムのようなキャップで閉めている。

キュポン、と気持ちのいい音をたててキャップをはずす。

「いい？よく見ててね。コトラ、ハウス！」

瓶の入口をコトラに向け言った。

すると、コトラの体はみるみるうちにその瓶に吸い込まれていった。

「見た？この瓶はね、召喚獣をしまっておく入れ物なんだ。コトラ、アウト！」

しゅるんと、瓶からコトラはでてきた。「そして、ボクら召喚獣は悪さをする妖怪を退治するんだ。」
とコトラが付け加えた。

「さて、キミの依頼はなに？」

彼女はうつむきながら言った。

「わたしの家のまわり…、よく事故が起こるんです。事故が起きる度におかしな夢を見て…、初めて見たときから…その…。」

「妖怪が見えるようになった？」

空谷に言い当てられた。

驚いた様子で続ける。

「はい、でも誰にも相談できなくて…。そんなときにここを見つけたんです。」

「そうかそうか、これまで頑張ったね。よくやったよ。」

につこりと彼女に笑顔に向けた。

屈託のない笑顔。

それに合わせてコトラも笑う。

なんだか、気持ちが悪くなった。

「この手のパターンはよくあるんだ。単刀直入に言うよ、そいつはキミを食おうとしてる。」

えっ、と思うのと同時に、彼女の目が見開かれた。

「食うって、わたしを食べるんですか…？」

見えない恐怖に体が震えた。怖い。
足がガクガクしている。

「ああごめん、もう大丈夫だよ、ここに来たんだから。」
彼女の肩にそつと手をやった。

ソファに座らせる。
そのとなりに座った。

「妖怪なんてそつこらじゅうにいるんだ。人の気持ちや、年月の入った物。全てに魂が宿っているんだよ。」

彼女の目を見据えながら言った。
彼女も頷く。

第三話（後書き）

妖怪が見えるようになりたいです。そんな思いを胸に。

第四話

「そういったものの想い、まあ心みたいなものなんだけどさ。想いが強すぎて暴走することがあるんだ。」

淡々と話してゆく。

ものにも心があるなんて信じられないといった様子だ。

「それが今回の事件なのかもしれないね…。」

静かに彼女に聞いた。

「ところで、キミ、名前は？」

「ソノダサチ 園田 幸です。一年五組の。」

がたつ、とテーブルの揺れる音と共に空谷は立ち上がった。

「うん、幸さんね。よろしく。」

差し出した手を、幸は握った。

この人ならやってくれるかもしれない。

だれにも見えていなかった妖怪が見えているのだから。

「あ、ああー、みつちゃんまだ来てないよね？」

空谷がコトラに聞いた。

来てない、とコトラが返す。

そこへ、扉が開く音がした。

「ごっめん遅れた、え？依頼者？めっずらし。」

入ってきたのは女の人だ。

といっても彼女も生徒。

上着のボタンを一つも止めていない、ラフな格好だ。

肩にかかるぐらいの長さの黒髪が印象的だった。

「えー、林蜜^{ハヤシミ}つて言いまーす。よろしく。」

あっさりとした自己紹介に自己紹介で返す。

「純と同じ三年三組です。」

と言うのと同じタイミングで、空谷が飛びかかった。

「うわーん、みっちゃん寂しかったよーっ！」

それを手慣れたようにかわし、蹴りを食らわす。

うげあっ！と呻き声を上げて床に沈んだ。

コトラもやれやれといった顔で見えていた。

第四話（後書き）

人の名前に問題がありそうですね、だって即席なもごもご。

それが犬クオリティ（そんなクオリティじゃない）

第五話

「幸さんにも、サクラちゃん紹介してあげたら？」

「へいへい、見せたげるよ、あたしの召喚獣。」

そう言うがはやく、内ポケットから小さな瓶をだしてあの言葉を放った。

「サクラ、アウト！」

すると瓶のなかからしゅるつと鳥がでてきた。

大きさはだいたい鷹くらい。

うえからしたまで薄黄色に染まっている。

頭のとっぺんから二本の毛が生えていた。

羽根の先に向けて赤いグラデーシヨンになっていてとても綺麗である。

「いやいやいや、初めまして。うちはサクラっていいまんねん、どうぞよろしゅう。」

ぴょこんっ、と二本の羽を可愛らしく揺らしながら、一礼。
お辞儀をしながら挨拶してくれた。

むくつ、と転がっていた空谷が意識を取り戻す。

「あだだ、ひどいよ…。」

「うつさい、オマエが抱きつこうとしたからだろ。」

そんな空谷に冷たく言い放つ。

「じゃあ、よろしくね。」

「……………は？」

突然言われたが、蜜にはなんのことだかわからない。
空谷は笑顔で続けた。

「なにを…？」

「下調べだよ。」

平然と伝えた。が、蜜には酷なようで。

「ああもう、いつもあたしにはすっかりやらせやがって！」
言いながら容赦なく顔にパンチをかました。

「…殴る、必要…くない…？」

最期の一言を残して、空谷はがっくりと二度目の気絶をした。

「んで、事件が起こった場所は？」

しばらくして、幸の家の近くに着いた。

着くまでにたくさんの妖怪が町中に居たのを目にした。

毛玉のような妖怪や、一つ目の大ガラス、近くに寄らないと妖怪かどうか判断しかねないものや、家具のような妖怪もいた。

「ここ？その場所って。」

蜜は辺りを見回してみる。

害のありそうな妖怪は見当たらない。

「はい、確かにここです。」

「みっちゃん、なんか居そうな気配はしよるよ。」
とサクラが言った。

「事故があつたとき、どんな夢を見るの？」
蜜はたずねた。

夢のほうにヒントがあると考えたからだ。

「ある、男の子の夢を見るんです。」

「男の子？」

こくり、と彼女は頷いた。

「わたしの幼馴染みだった男の子と遊ぶ夢なんです。昔、事故死してしまっただけです。」

「へえ、そりゃ悲劇のヒロイン……ン、」

突然言葉を濁し、その場にうずくまった。

頭に言葉が流れ込む、目の前が歪み立っているのも苦しいくらいだ。

「だ、大丈夫ですか？」

幸が心配そうに寄ってきた。

息も絶え絶えだ、頭のなかで声がした。

幸二、近付クナ

ココカラ立ち去レ

謎の言葉に意識を持っていかれそうになる。

幸ヲ返セ、幸ハ僕ノモノダ

ああ、もしかしたらコイツは

第五話（後書き）

どうも、相変わらずのだめっぷりをさらしております。

なにかアドバイスみたいなものや感想下されると嬉しいです。なにぶん小説なんてかかない子だったので…。

第六話（前書き）

あほっばいやつを書くのが大好きです。六話いつてみよー！

第六話

「意識をしっかりと持て！自分が誰なのかを思い出せ！」
誰かの声が耳に届いた。

糸が切れた様に目を覚ます。
めまい
眩暈も頭痛もしない。

声の主は誰なのか、辺りを見回してみると、屋根の上に人らしき影が立っていた。

「あ、あいつは…。」

蜜には誰かわかったようだ。が、幸にはわからない。
それもそのはずだった。

「現三年一組、学校一の秀才とはボクのことさ！」

屋根の上でポーズをとっているそいつは、蜜、純の同級生らしい。
とても清々しい顔をしていた。
そのポーズが格好いいなどと思っているようだ。

蜜にはあほらしくてたまらない。

「あいつは一組の遠藤和、エンドウカズ馬鹿だよ。」
と蜜の説明が入る。

幸はなんとなくそれに納得した。

「オワアー！馬鹿って言うなあ！」

そう叫んで駆けてくるが、そこは屋根の上。

期待を裏切らないほど豪快に屋根からコケ落ちた。

「和、だあいじょぶかー？」

竜が和の元へと飛んできた。

真っ青なボディに大きな翼が覆い被さるように生えている。

そしてがっしりした体付き。

誰も見れば震えあがると言えるだろう。
ただし、枕サイズでなければの話だ
(枕サイズ：自分の枕を参考にどうぞ)

その竜はとても小さかった。

男はぼろぼろだ。

屋根から落ちたのだから仕方ないだろう。

制服をきちんと規定どおりに着こなしている。

そんな和はよこれがついた制服をはたいた。

「それで、なんのよう？」

蜜が冷たく言った。

目線も和の方へ向けていない。

「ボクは自主的に調べて来たんだ、ここあたりなにか妖怪の反応があつてね。ねえヒュウガ…。」

ヒュウガとは先程の竜らしい。

だが、ヒュウガは全く和の話を聞いていなかった。

それどころか、iPODのようなもので音楽を聞いている。
手には、スナック菓子。

「人の話を聞けえええええ！」

怒鳴りながらiPODとスナック菓子を取りあげる。

ばかん、とゲンコツで殴った。

いつもこんな調子なのだろうか。

「いったいなあ。そう、ぼくが探知したのさ。」
間延びした声でヒュウガが答えた。

「あんたたちも、か…。」

少し考えた蜜はぱつとひらめいたような顔をした。
そして和の手を掴む。

「わあ、いいなあ。」

ヒュウガが口を挟むが、蜜は無視して、
「林さん有難う、あとはあたしたちに任せて家に帰ってて。遠藤、
ヒュウガ、来て！」

そう言うとき蜜は和を引きずりながら駆けて行った。

あとからのんびりと追いかけていたヒュウガはまたもや羨ましそう
に和を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5742a/>

コトラ！

2010年10月22日00時27分発行